

# どんな手術でも 諦めない！ いのちの砦を 守り抜く

金沢大学附属病院 呼吸器外科教授 松本 勲

## 自分の家族を助けたい

「昆虫が好きで、高校の頃まで昆虫博士になりたいと思っていました。それまで、大学は理学部志望でした」

取材中、松本勲教授の口から意外な言葉が飛び出した。医師になって35年、金沢大学附属病院の旧・第一外科（後の心肺・総合外科、先進総合外科）に入局以来、心臓、呼吸器、消化器という、いわば外科医の王道ともいえるコースを歩いてきた。

いま、金沢大学附属病院呼吸器外科の教授として、世界的視野に立った最先端の医療を追求し、それを「自分や自分の家族に受けてもらいたい」とアピールする。呼吸器外科領域のどんな手術でも最後まで諦めない。外科医・松本の原点を問いかけた。

「高校生の頃、家で祖母が発熱して痙攣を起こしたんです。様子を見てただ事ではないと思いながら、自分も家族も右往左往するばかりで何もしてあげられなかった。そのときに、家族に何かあったら助けたいと思って、昆虫博士じゃ守ってあげられない。そう思って、のちに医学部に志望を変えました。原点といえば、それがそうかもしれません」

ISAOMATSUMOTO

KANAZAWA UNIVERSITY HOSPITAL

以来、「自分や自分の家族に常に最高の医療を届けたい」気持ちで患者と向き合い、外科医としてのキャリアを重ねてきた。

医師になつて4年目、勤務医として多忙を極めていたころ、喘息を患っていた父親が重積発作を起こしたと連絡を受ける。通常の喘息発作とは異なり、重度の気道狭窄が24時間以上継続する状態だ。呼吸困難や意識障害を引き起こし、生命の危険が伴う。

父親が窒息状態であることを知った松本医師は「勤務先だった石川県立中央病院に救急搬送してもらい、自らの手で気管挿管した」そうだ。

「医師として患者（父親）と向き合いながら、どんな治療をすればいいか。どうしたらこの人を助けられるかを必死で考えました。同時に、瀕死の状態で挿管された父親を見守る家族の気持ちも、痛いほどよくわかりました。父は、残念ながら16年後、三度目の発作を起こして亡くなりますが、両方の立場を経験したことで、自分や自分の家族を助けるつもりで常に最高の医療を届けたい思いが、より強くなりました」

自分や家族が重い病気になったとき、誰しも最良の医療を求めるはずだ。その

手術の半数以上は、原発性肺がんが占めており、そのほか気胸、縦隔腫瘍、肺良性腫瘍、転移性肺がんなどに対して胸腔鏡手術やロボット手術を行い、体への負担が少ない治療に努める。

「呼吸器外科では、伝統的な手術から最新の胸腔鏡や、Da Vinci<sup>TM</sup> hirotor<sup>TM</sup> などロボットを使った手術まで幅広く対応しています。私が教授になって2年8カ月になりますが、患者さんに必要な手術を、必要最小限の侵襲で行い、元気に社会復帰していただくことを最優先してきました。若い医局員には、*“井の中の蛙”*で終わってほしくないで、できれば海外に目を向けながら新しいことにチャレンジして欲しいと訴えています」

松本教授によれば「患者の体への負担が少ない低侵襲の手術は、いまや当たり前」であり、今後はさらに一歩進んで「肺移植にも力を入れたい」と意欲を見せる。「肺移植ができる施設は、日本海側では京都大学医学部附属病院にしかありません。北陸で肺移植ができる施設はないので、なんとか私の任期中に肺移植ができる礎をつくりたいと思っています。金沢大学附属病院では、腎臓と肝臓移植はすでに行っています。北陸でも肺移植、心臓移植ができるようにしたいので、施



ときに、身近に最新の医学的、科学的な証拠に基づいた、最良の医療・治療を実践できる環境があれば、迷わず選択するであろう。松本教授が掲げる呼吸器外科の診療方針は、そうした患者や家族の心情に寄り添い、重い病気に立ち向かう医師としての決意を示すものでもある。

### 低侵襲から肺移植へ

金沢大学附属病院の呼吸器外科は、旧・第一外科時代から「世界的視野に立った最先端の医療を追求し、患者の治療や地域医療に活かす」ことを第一に、患者一人ひとりの病態に即した診療を展開してきた。

対象は、胸部における心臓と大動脈以外のすべての疾患だ。肺、気管及び気管支、胸膜、縦隔、横隔膜などの臓器で、疾患としては悪性疾患、良性疾患、自然気胸、膿胸などの感染症、漏斗胸、先天性肺疾患、外傷など幅広い分野の診断、治療を行う。

手術件数は、年間約300例。関連病院に出向いて手術するケースもあり、実際の件数はもっと多い。松本教授は「これだけの数をこなせるのは、北陸の施設ではかなり少ないと思います」と胸を張る。

設要件を含めて、そのための研究と実施できる医師の育成に力を入れていきたいと思っています」

### 肺がん治療が劇的に変化

呼吸器外科の強みや実績を後押ししているのが、他の診療科との連携だ。金沢大学附属病院は、数年前に診療科の再編を行い、とりわけ旧第一外科、第二外科を「外科」に一本化した。金沢大学外科アライアンス：KASA (Kanazawa University Surgeons' Alliance) という新しい枠組みを作り、研修医や医学生の入局にあたって「外科」が入口となり、そこから専門によって、心臓血管外科、呼吸器外科、消化管外科、肝胆膵移植外科、乳腺外科、小児外科といった臓器別に分かれる。

この外科の一本化が、各講座の教授陣と診療面での密度の濃い連携につながっている。松本教授がメリットを強調する。

「（連携は）思いのほか機能していて、たとえば小児外科の先生に電話一本で外来に出向いてもらったり、これまで紹介状を書いてお願いしていたことが、手術中に診てもらえるようになったり。各講座の先生同士が気軽に連絡を取り合い、

必要な時に必要な連携がとれることが大きな変化だと思います」

手術や集学的な治療が必要な疾患についても、連携が重要な役割を果たしている。毎週1回、呼吸器内科、腫瘍内科、放射線科、中央病理部の医師と、呼吸器外科の合同カンファレンスを行い、患者一人ひとりの治療計画を綿密に立てる。疾患に合わせて化学療法や放射線療法を含めた複合的な治療を行うなど、常に最高水準の医療を提供する体制が取られているのだ。

とくに呼吸器領域は、ここ数年肺がんの治療法が劇的に進化した。オプジーボやキイトルーダといった免疫チェックポイント阻害薬や分子標的薬などの出現が、治療後の生命予後を大きく変えたのだ。「手術単独の治療では難しい場合に、これまで化学療法や放射線治療を行ってがんを縮小してから手術するのが一般的でした。それが2022年ごろから、免疫チェックポイント阻害剤や分子標的薬が保険適用になったこともあって、手術前後に使えるようになったのです。これが進行性肺がんの生命予後を大きく伸ばす結果につながっています」

当然それは、呼吸器内科や腫瘍内科、放射線科などの連携の重要性や密度

を、さらに高める結果にもなっている。

「呼吸器内科の矢野聖二教授とは以前から親しい関係ですが、患者さんの状態を診て『内科で化学療法をするより、早めに手術をされた方がいいのではないですか』と、外科の立場になってアドバイスをいただきます。私たちも手術が絡む症例で、手術前に『先生、内科的にはどうでしょうか』とやりとりしながら、状況を確認しあいます。その関係がうまくいっていることが、手術や治療成績にもつながっていると思います」

### 呼吸器外科の魅力とは？

松本教授は、呼吸器外科の診療レベルを、関連病院や地域の医療機関にも惜しみなく提供する。「世界的視野に立った最先端の医療を追求し、患者はもとより、地域医療にも活かしていく」ことが、医師になった時からの変わらないテーマでもあるからだ。

「いままで自分たちが提供してきた医療の質を落とすことがあってはいけませんし、金沢大学附属病院の呼吸器外科の医療レベルは、世界的にも見劣りしない。常に最良、最善の医療を、受けたい人に惜しみなく提供してくれる。そういう存

在であるべきだと思います。北陸の患者さんが、ここに来ればきつとなんとかしてくれる。その期待に応えられることが『最後の砦』としての私たちの役割だと思います」

その使命を果たすために、どこにも真似のできない手術、どんなに難しい手術でも最後まで諦めない姿勢を貫く。

「局所に進行した肺癌や悪性縦隔腫瘍が背骨や心臓、大血管、食道、気管などの重要臓器に浸潤している場合でも積極的に根治的な手術を行って、臓器の再建を行っています。手術は難しく、長時間に及びます。このような手術ができる病院は日本でも数少ないし、真似のできない手術だと思います」

いま、外科医のなり手が少なくなっている。その中で、金沢大学附属病院の呼吸器外科では「少しずつ若い医局員が増えていく」という。肺移植手術をめざして、夫婦で入局した医局員もいる。呼吸器外科の魅力の一端を、松本教授はこう語る。

「呼吸器はあらゆる臓器に関連しています。それに同じ外科の中でも守備範囲が広く、働き方やワークライフバランス、QOLも悪くない。私自身がいろいろ経験してきた中で、感じている魅力の一つ

だと思っています。外科医は、自分の手で治療し、最後まで完結できる。その魅力を若い人たちに、どんどん伝えていきたいと思っています」

どんな疾患や手術でも決して諦めない。呼吸器外科のスペシャリスト、松本教授の真髄でもある。



### 松本 勲 (まつもと いさお)

金沢大学附属病院 呼吸器外科教授

1991年 国立金沢大学医学部医学科卒業

金沢大学附属病院 第一外科 入局

1992年 公立能登総合病院 外科

1993年 国立静岡病院 外科

厚生連高岡病院 胸部外科

1994年 金沢大学医学部附属病院 第一外科

1995年 石川県立中央病院 呼吸器外科

金沢大学医学部附属病院 第一外科 医員

金沢有松病院 外科/小松市民病院 外科

2001年 横浜栄共済病院 胸部心臓血管外科

2003年 金沢大学医学部附属病院 心臓・総合外科 助手(現助教)

2009年 金沢大学附属病院 呼吸器外科 臨床准教授

2013年 金沢大学附属病院 講師

2014年 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 心臓病態制御学 准教授

金沢大学附属病院 呼吸器外科 臨床教授、科長

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 先進総合外科学 准教授

2020年 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科 呼吸器外科学 准教授

2023年 金沢大学医薬保健研究域医学系 呼吸器外科学 教授